

西宮歴史調査団ニュース 第12号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662-0944 電話 0798-33-1298

信行寺—法灯を守り続けて630年—

戸次節子（古文書班）

はじめに

古文書班では、旧西宮町(町方15町と浜方5町で構成)の宗旨人別帳(以下、宗門帳)を順次調査している。最初に取り組んだのは旧西宮町最大の町である浜東町であった。浜東町の宗門帳には多くの寺院名が記載されているが、その中で最も登場数が多い寺が浄土真宗本願寺派の信行寺である(写真1)。

令和元年(2019)夏、信行寺(用海町1-22)を訪ねて2度にわたり調査をおこなった。まず、8月1日に前住職の四夷教修さん(昭和6年生まれ、調査時満88歳)から話をうかがった。この時に拝見した古文書を写真撮影するために、9月10日に再度うかがい、聞き取りもした。

第1回調査(8月1日):調査員2名(中田一郎、戸次節子)

第2回調査(9月10日):調査員2名(中田一郎、戸次節子)

調査の概略は「西宮歴史調査団通信」令和元年12月号で報告したが(註1)、本稿は調査の成果をまとめたものである。



写真1 信行寺山門

1. 信行寺の歴史

『西宮市史』第2巻によると（註2）、信行寺は明徳2年（1391）の開基で、四夷（しい）新左衛門（法名浄専）が発心し、仏門に帰して開いたのがはじめであるという。代々住職を勤める四夷氏の祖先は、蛭児大神がこの地に鎮座のときに供奉した一人であると伝えられている。元和6年（1620）、寺号を真光寺とすることを本願寺から認められた。天和2年（1682）に信行寺と改められた。江戸時代初期には土地の有力な信徒を有していた。宝永3年（1706）、土豪勝部政寛が梵鐘を寄進、また勝部如春斎（註3）が大幅の当麻曼荼羅写本（註4）を揮毫寄進した。寛政13年（1801）、興正寺（註5）から院家官（大寺に属する由緒ある寺院）の待遇を受けた。文化7年（1810）には、弘長2年（1262）に没した親鸞上人の550回忌が盛大におこなわれるなど法灯は栄えた、とある。

開基の伝承から信行寺と西宮えびす社が深い関係にあることがうかがえる。前住職によると、「開祖の四夷新左衛門はえびす社の神職であった」と伝わっているそうだ。また、旧津門村の念立寺（現・津門西口町13）は、四夷氏の隠居寺で300年ほど前に分家した。しかし、昭和28年（1953）に廃寺となり、過去帳は信行寺が預かっている。

浜東町の宗門帳は、毎年宗派別に作成されたが、浄土宗が1冊、禅宗・真言宗・法華宗の3宗派が1冊にまとめられたのに対して、浄土真宗（一向宗）は3冊に分けられていた。近世の西宮町で浄土真宗の檀家数がいかに多かったかがわかる。そのほとんどが、西宮町内に所在する信行寺と、その北に位置する正念寺の檀家であった。例えば、写真2の安政6年（1859）「借家一向宗門帳」の座古屋うの一家は、「一向宗当所（西宮町）信行寺旦那」と記されている（註6）。

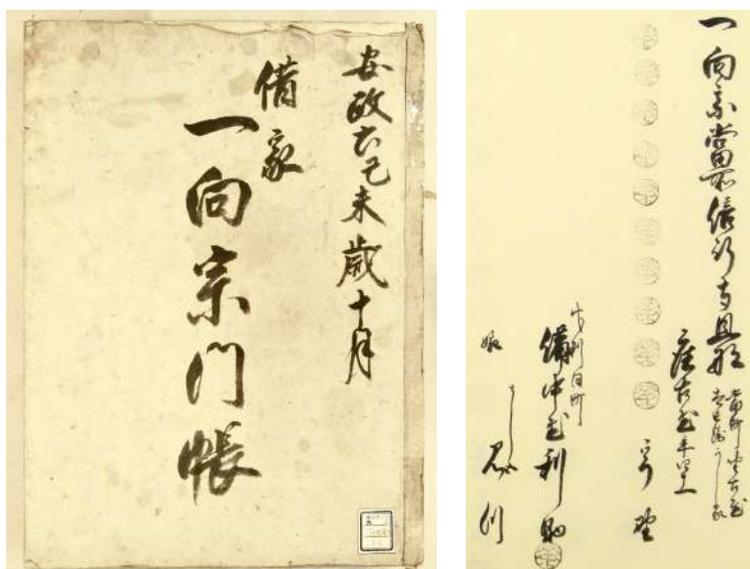


写真2 「借家一向宗門帳」表紙（左）と「座古屋うの」部分（右）

2. 前住職からの聞き取り

信行寺前住職は、昭和16年（1941）に10歳で父を亡くされた。跡継ぎの従兄も27歳という若さで亡くなったため、正式の住職就任は20歳だが、実際には15歳で住職の役を担った。そして、平成29年（2017）に引退されるまで、70余年にわたり住職としての重責を果たしてこられた。以下は、前住職の話をもとめたものである。

戦前の信行寺

父の代（昭和の初め）には檀家数は600軒ほどあったが、現在は減った。檀家には八馬兼介氏、勝部重右衛門氏、森本甚兵衛氏、木谷市右衛門氏、藤田卯三郎氏などをはじめ、有力な酒造家も多かった。八馬兼介氏（神戸銀行頭取、貴族院議員）は社会事業にも熱心であった。西宮一の資産家であった辰馬氏と共に、例えば市内の上水道の敷設への巨額の寄付や、市内に散在していた墓所をまとめて満池谷に移すなどの事業をおこない、地域の発展に貢献した。昔の久保町あたりは酒造業者等の富裕層の邸宅が立ち並ぶ屋敷町だった（図1）。しかし、空襲後に多くが阪急沿線へ引越し、今は高層マンションや大型スーパーが並ぶ町へと変貌してしまった。

戦時中の信行寺

父が亡くなった後は、母と姉、まだ子どもの自分だけで寺を守ることとなった。昭和18年（1943）には、宝永3年（1706）寄進の梵鐘を供出した。鐘に赤たすきをかけて皆で送り出した。そのような時代であり、仕方のないことではあったが、今思うと残念なことである。

昭和19年（1944）に県立芦屋中学校に入ったが、学徒動員され、工場で紫電改（註7）を造る日々であった。いよいよ西宮にも空襲が増えてきたため、ご本尊の阿弥陀如来と、もう一体の阿弥陀如来を土中に埋めて守ることにした。井戸杵を3つ買ってきてつなぎ、長持に納めた阿弥陀如来を穴に入れた。女子供だけの作業ではあったが、何とか土中に埋めることができた。

昭和20年（1945）8月5日夜中の大空襲（註8）では、飛び起きて北へ逃げた。宝暦9年（1759）建立の本堂、庫裡、鐘楼、太鼓楼、山門など殆どの建物が焼失し、残ったのは経蔵（土蔵）だけであった。

終戦後に埋めていた2体の仏像を掘り出した。湿気で手などが傷んでいたが、ご本尊が無事であったのは何よりであった。後に仏師に修理してもらった。

戦後の移転

昭和21年（1946）から町の復興、整備がはじまった（註9）。第二阪神国道（現国道43号）の敷設にあたって優先されたのは、町の中心的存在であるえび

す社が道路により分断されないことだった。その結果、国道はえびす社のすぐ南側を通すことになり、信行寺は道路計画の真上にあったため、移転を余儀なくされた。かつての寺域は600坪で、北門から南門までが約50mあった。移転候補地にはより広い面積の遠隔地もあったが、経蔵を残したかったので、元の場所のすぐ南東に位置する現在地を選んだ。その代わりに面積はほぼ半分になった。昭和22年（1947）、丸太を並べた上に経蔵を載せて移動し、寺は現在地に移った（図2）。

鉄筋の本堂を再建したのは昭和42年（1967）4月であった。

阪神淡路大震災

平成7年（1995）1月17日の阪神淡路大震災で、鉄筋コンクリート造の本堂を残して他の建物は全壊、経蔵も倒壊した。本堂の本尊は台座から転げ落ち、再び損傷した。

その後、西宮の町の復興とともに寺も徐々に再建をはたし、現在の姿となったのは平成10年（1998）である。



図1 昭和初期の信行寺（昭和11年（1936）「西宮市鳥瞰図」（にしのみやデジタルアーカイブ）の一部に加筆）



図2 信行寺の移転（昭和40年（1965）発行『西宮復興区画整理誌』付図「西宮都市計画事業 復興土地区画整理事業換地図」（画像データ提供：西宮市情報公開課）の一部に加筆）

3. 信行寺の寺宝・寺物

信行寺に伝わる寺宝・寺物について、前住職から話をうかがった。

(1) 信行寺所蔵品

①阿弥陀如来立像

本尊。像高約100 c m。定朝風。平安末期～鎌倉初期の作（推定）。

②阿弥陀如来立像

像高約55 c m。無彩色の檀像（註10）。平安中期の作（推定）。

③親鸞上人四幅御絵伝 貞享3年（1686）

貞享3年（1686）、寂如上人（本願寺派第14世宗主）の代に西本願寺から賜った。平成30年（2018）、表装をしなおした。

④襖絵 宝暦9年（1759）

栄松齋典郷作の8枚の襖絵。栄松齋は勝部如春齋が連れてきた弟子で、描いた翌年に亡くなった。かなり傷んでいる。

⑤過去帳

元禄2年（1689）から記載がある。旧西宮町の寺の過去帳はだいたい元禄頃からしか残っていない。

⑥「寺社御改御吟味写」 元禄5年（1692）

海清寺のものを明治28年（1895）に写したもの。

⑦「寄附録」 文化6年（1809）

⑧「惣旦中 宗旨印形帳」 文政13年（1830）

⑨「請印帳」 文政13年（1830）

※⑦～⑨は次章で詳しく紹介する。

(2) 信行寺旧蔵品

当麻曼荼羅写本

勝部如春齋が揮毫寄進したもの。アメリカのボストン美術館に収蔵されていると言われていたが、近年、西宮市大谷記念美術館で所在を確認した。ボストン美術館に収蔵された経緯は不明。

4. 信行寺の古文書

前章の寺物の中で、古文書班員として特に興味深かった⑦～⑨の史料3点を以下に紹介する。

⑦「寄附録」 文化6年（1809） （写真3）

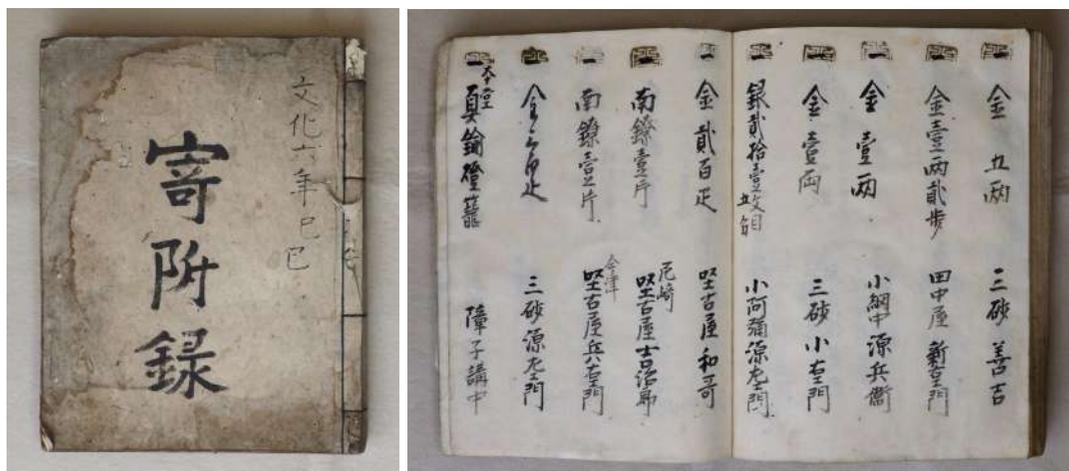


写真3 「寄附録」表紙（左）と寄付者（右）

信行寺への寄付者と寄付の内容が記されている。金8両から白銀、南鐐、銀、青銅、銭200文まで、莊嚴のための品々、さらに綿、油、米、麦など多岐にわたっている。身の丈に合わせての寄付、というところだろうか。

翌文化7年（1810）には親鸞上人550回忌が盛大に催されたので、そのために集められたものだろう。当時の信行寺の繁栄ぶり、西宮町人の豊かさがわかる貴重な史料である。

⑧「惣旦中 宗旨印形帳」 文政13年（1830） （写真4）

⑨「請印帳」 文政13年（1830） （写真5）

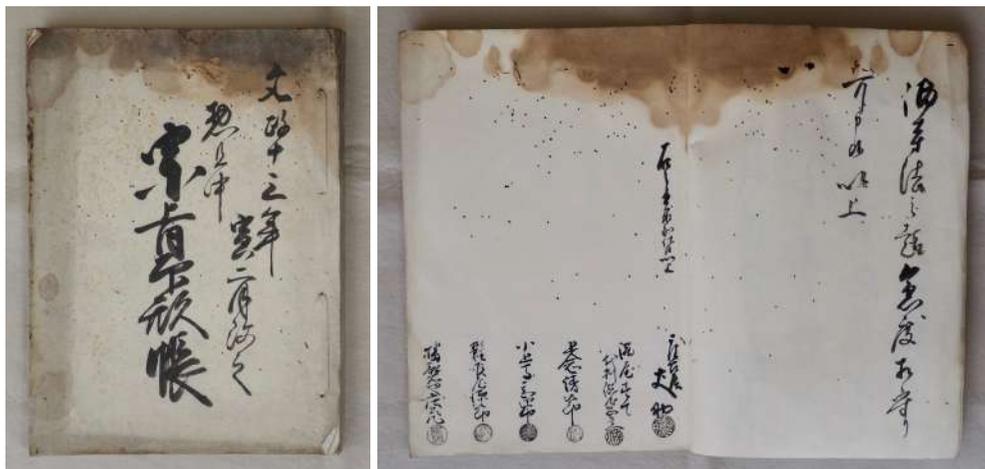


写真4 「惣旦中 宗旨印形帳」表紙（左）と檀家名（右）

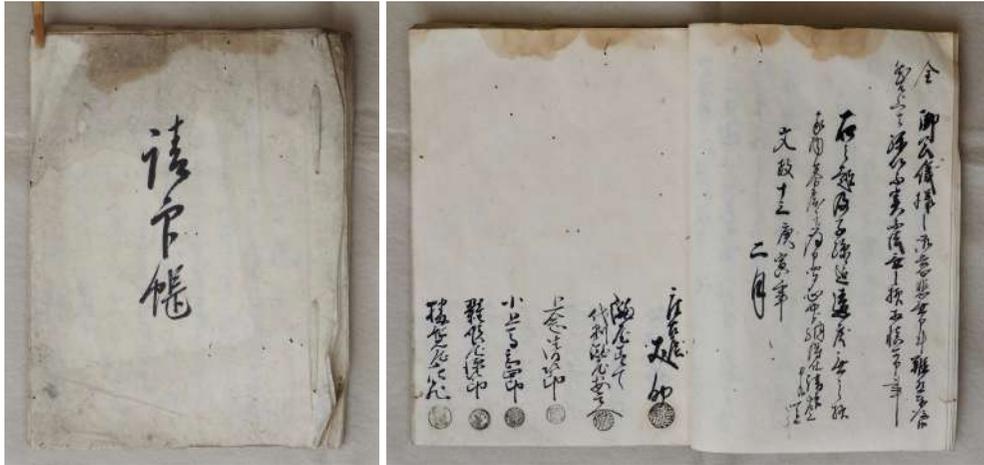


写真5 「請印帳」表紙（左）と前書きと檀家名（右）

⑧⑨は同じ年に作成され、信行寺の全檀家名とその印が記録されている。

古文書班の日頃の作業でお目にかかっている屋号、印が並んでいるので面白い。今後の調査の参考になるのではないだろうか。

おわりに

実は信行寺は私の母方の祖父の代から葬儀や法事でお世話になっている寺である。亡き両親も前住職に見送っていただいた。

調査団に入り、宗門帳で信行寺の名前を頻繁に目にして、改めてその歴史が気になっていたのも、今回の調査はじっくりとお話を伺うまたとない機会となった。終戦直後の身内の葬儀でお経をあげていただいたとき、前住職はまだ童顔の少年であったと祖母から聞いたことが思い出された。

また前住職からは、在職中は旅行も遠出の外出もすることなく住職の仕事を全うし、寺を守ってきたと伺ったことがあり、今回のお話とあわせてまことに頭が下がる思いであった。

西宮町の寺院は、市井に生きる町人の生活の拠りどころとして長く存在してきた。信行寺の前住職は生き生きと過去の経験を語ってくださったが、宗門帳に登場し、現存する他の寺もそれぞれの歴史、逸話をお持ちであろう。聞き取り調査を他の寺にも広げて続けていければ、と思う。

<註>

(註1) 中田一郎「信行寺前住職からの聞き取り～戦災・震災…630年の歴史」(西宮歴史調査団「西宮歴史調査団通信」2019.12月号)

(註2) 『西宮市史』第2巻(西宮市役所、1960年)867～868頁

- (註3) 享保6年（1721）～天明4年（1784）。西宮生まれの絵師。摂津を中心に活動した。
- (註4) 當麻寺に伝わる浄土曼荼羅。鎌倉時代以降、浄土信仰の普及とともに大小の転写本が多数作られた。
- (註5) 西本願寺の南隣に位置し、寛政13年（1801）当時は西本願寺の脇門跡寺院であった。
- (註6) 安政6年（1859）「借家一向宗門帳」（西宮市所蔵文書0746）
- (註7) 大日本帝国海軍最後の戦闘機。
- (註8) 西宮では昭和20年（1945）に米軍の無差別爆撃が始まった。終戦直前の8月5日夜から6日未明にかけての大空襲では市内の多くが罹災し、中心部は一面の焼け野原となった。
- (註9) 昭和21年（1946）から土地区画整理事業が始まり、第二阪神国道の敷設計画が決定された。
- (註10) 香木を彫刻した仏像。

<参考文献>

- 『西宮市史』第2巻（西宮市役所、1960年）
 - 『西宮市史』第3巻（西宮市役所、1967年）
 - 「西宮歴史調査団ニュース」第2号（西宮市立郷土資料館、2014年）
 - 「西宮歴史調査団ニュース」第6号（西宮市立郷土資料館、2017年）
 - 「西宮歴史調査団通信」2019.12月号（西宮歴史調査団、2019年）
- にしのみやデジタルアーカイブ <https://archives.nishi.or.jp/index.php>

<謝辞>

信行寺前任職四夷教修さんには、この度の調査を快くお受け下さり、寺の歴史や伝来の寺宝、寺物、古文書等について、また戦前戦中の多くの興味深いエピソードについて2度にわたりお話下さいました。この場を借りて心から御礼申し上げます。

西宮歴史調査団は、団員に登録した市民が主体となって、西宮市内の文化財を調査し、記録を作成する文化財調査ボランティア活動の団体です。西宮市立郷土資料館が主催しています。

西宮歴史調査団ニュース 第12号 令和2年（2020）10月8日